「良書ご案内」

書籍名	葬式消滅	著者名	島田　裕巳
出版社名	株式会社G. B.	発行年月	2022年6月

歴史は大河ドラマに登場する英雄たちだけのものではない。 お葬式、お墓の変遷から歴史を眺めればまた違った景色が見えてくる。
私たちが日頃当たり前と思っている常識は、短い時間の中で習慣化されたものが多数ある。
本書から、お葬式、お墓、お寺、宗教等に関して気付かされることがあった。

お葬式の誕生は、曹洞宗・道元の時代にさかのぼる。 早朝から深夜まで修行僧は座禅に打ち込む。只管打坐の世界であり、修行中は一切収入がない。しかし修行道場を維持するには確固たる経済的基盤が必要だ。 そこで仏教式葬式の原型が生まれ、他の宗派にも広がっていった。 お寺の存続に、お葬式は多大な役割を果してきたのだ。（但し浄土真宗、日蓮宗は取り入れなかった。）

現在私たちは、多死社会を迎えている。1950年頃の死者数は年間70万人前後で推移していたが、1990年には80万人、その後2003年に100万人を超え、現在140万人に迫っている。
やがて2030年には160万人に達すると推計されている。 年間160万人の死者は、160万件の葬儀、火葬がある。その葬儀は、現在簡略化が進み、家族葬が定着しつつある。 要因の1つは、死者の高齢化にある。寿命が延びて死ぬのは高齢者、当たり前のようで、ついうっかりしていた。
90歳の妻が、連れ合いの葬式を出すのは、体力的にも精神的にも厳しい。故人の関係者も少なく、葬儀にも火葬にも立ち会う人がいなくなっている。 お葬式は間違いなく簡素化、消滅の方向へ向かっている。

更に根本的な大きな変化がある。 平均寿命が短い時は、若くして死ねことも珍しくなかっただろう。
多くの人が「いつまで生きるかわからない」と考えていた時代は、宗教を受け入れる基盤があった。
現世の暮らしは、病気、事故、戦乱、飢饉、疾病によって亡くなる確率は高く、鎌倉仏教が全盛の時代の平均寿命は20代前半だった。死後、極楽浄土に生まれ変わる信仰は強く支持され受け入れられていたのだ。

自分が高齢まで生きられることを前提とした長寿社会では、宗教の説得力は弱くなる。
別の悩みが生まれる。 長生きするリスク、つまり経済の問題、健康寿命の問題、生き甲斐も問題だし、将来の認知症の不安もある。 人生が長くなれば、来世への期待も小さくなる。死生観が変わったのだ。
宗教の役割、お寺の役割がこのままでいいはずがない。 お寺も、宗教も弱体化していくのか？

浄土思想の普及、禅宗の成立から800年近くになる。 私たちは、お葬式、お墓、菩提寺、宗教から解放されて自由になれるのか？ はたまた拠り所をなくして不安を生きるのだろうか？

岩城

編集後記

	西成区	阿倍野区	麻生区	川崎区
総人口/2020年	106,111	110,995	180,705	232,965
病床数	1,478	1,717	1,956	2,686
人口10万人あたり	1,392.9	1,546.9	1,082.4	1,153.0
後期高齢者/2020年	20,130	14,944	22,895	24,707
入所型+特定施設	2,295	1,457	2,920	1,873
後期高齢者千人あたり	114	97	128	76
2040年医療需要	68	107	121	113
2040年介護需要	68	118	146	121

※2020年＝100

※日本医師会 地域医療情報ｼｽﾃﾑ より

今回は、5/23朝日新聞の「ご長寿日本一、川崎市麻生区 男女とも独占」の記事から。麻生区の男女平均寿命は84歳と89.2歳、大阪市西成区は男女共に下位1医と不本意な結果に、73.2歳と84.9歳。ちなみに**平均は男性81.5歳/女性87.6歳**(厚労省「令和2年市区町村別生命表の概況」より)、わが町は?と思わずにはいられない。左記は医療・介護の需要予測表、併せて見ると面白い。5指標目の入所型に昨今増え方著しい住宅型やサ付住宅、ﾎｽﾋﾟｽ住宅は含まれず、加えると更に精度が増す。長生きの意味を考える。

発行所：株式会社ライフデザイン研究所
所在地：〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-4-8ｱｻﾋﾋﾞﾙ2F
Tel 06-4708-6844 Fax 06-4708-7067 編集人 伊藤